

Ⅲ シンポジウム

第1回 国内シンポジウム 「アジア仏教の現在Ⅰ」

■報告者・報告題目

中村尚司（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）

「東南アジア上座仏教の現状と課題」

スダン・シャキヤ（東北大学・日本学術振興会外国人特別研究員）

「ネパール仏教の現状と課題」

藤 能成（龍谷大学文学部教授）

「韓国仏教の現状と課題」

■パネルディスカッション：「アジア仏教の現在」

ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授）

パネリスト：中村尚司，スダン・シャキヤ，藤 能成

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター・センター長〈教授〉）

三谷真澄（龍谷大学国際文化学部准教授）

浅田正博（龍谷大学文学部教授）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

■開催日時：2010年10月9（土）13：00～17：10

■参加人数：120名

【報告のポイント】

アジア各地の仏教の現状と課題を探るため、「アジア仏教の現在Ⅰ」と題して本センターの設立記念シンポジウムを開催した。シンポジウムは、中村尚司，スダン・シャキヤ，藤能成の三氏により、東南アジア，ネパール，韓国の仏教の現状と課題に関する報告があり，その内容をうけて，入澤崇氏をファシリテーターとして，「政治と仏教」，「民衆と仏教」，「仏教界の社会活動」という3点を主なテーマとしてパネルディスカッションが行われた。

【報告の概要】

中村尚司氏は，現在大きな転換期を迎えているスリランカや東南アジアの上座仏教の現状とその課題について報告を行った。スリランカと東南アジア諸国は伝統的に上座仏教を介して相互に交流してきた経緯を持つ。ところが近年，スリランカでは僧侶が政界へ進出し，タミル人の分離独立運動に対して民族主義を鼓吹する。旧来の戒律の枠にとどまらない彼らの社会活動は，旧仏教の代表であるブッダゴーサの戒律体系に対する批判を生み出した。またタイにおいても，第2次世界大戦前からブッダダーサ師を先頭に社会活動が推し進められ，ベトナム戦争を契機として活動が拡大した。現在ではタイ仏教はエンゲージ

ド・ブディズムの世界的センターとなっている。ただし多様な階層が僧侶となるため、仏教の形骸化という課題も併せ持つ。ビルマ（ミャンマー）でも出家者は政治活動に参加しないことが伝統であったが、軍事政権による民衆抑圧と仏教弾圧に対し布施の受取を拒否する「覆鉢」という抵抗に打って出た。現在でも托鉢が寺院経済を実質的に支えているため、この政治行動の持つ意味は非常に大きい。ビルマの仏教僧たちは現在でも絶望的な闘争を継続している。最後に中村氏は、現代のアジア仏教が抱える様々な問題を考える上で指針となるのは、国際エンゲージド仏教ネットワーク（INEB）のジョナサン・ワッツが提言する「積極的な非統合（Positive Disintegration）」であるとし、それを体現していたアショーカ王の政治理念に注目したいと語る。「仏教」という枠組みを超えて多様な信仰と対話していく姿勢こそが、仏教の教えを現代に生かしていく道であるとの提言がなされた。

スダン・シャキヤ氏は、2006年に長らく続いていた王政が廃止されたネパールの仏教の現状に関して報告を行った。氏によると、ネパールはヒンドゥー教徒が全宗教人口の8割を占めるのに対し、仏教徒は1割であり、その仏教には、新興のテラヴァーダ仏教(上座仏教)と、チベット系仏教と、ネパール伝統仏教の3種類が存在する。テラヴァーダ仏教(上座仏教)は複雑な宗教儀礼が存在せず、種族・民族・カーストを問わず誰でも僧になれるなど開放的で、民衆から広く支持を受け、チベット系仏教もカトマンドゥ盆地を中心にネパール人の間にも浸透し年々信徒が増加している一方、ネパール伝統仏教はインド伝来の大乘仏教と密教の伝統を最もよく受け継ぐが、僧になれる資格はヴァジュラチャールヤの家系に生まれた者に限定され、檀信徒も世襲であり信者は年々減少しているということである。今後のネパール伝統仏教の課題として、伝統を守る一方、専門的知識を有する人材の育成など新しいあり方を模索する必要があるとの指摘がなされた。

藤能成氏は、2010年8月22日から9月3日にかけての韓国仏教の現状に関する仏教関係者への聞き取りを主とする現地調査の報告を行った。最初に、韓国仏教は、プロテスタントやカトリック（韓国において両者は別々の宗教という認識が強い）、儒教とならび韓国の四大宗教の一つであるが、朝鮮時代以降、山中仏教としてかろうじて命脈を保ち、また、日本仏教の影響による僧の妻帯をめぐる問題を起因とした争いなどにより長らく停滞しており、韓国仏教の現代化がなされたのは1990年代に入ってからであると、韓国仏教の歴史を概観した。そして、韓国仏教最大宗派の曹溪宗では、韓国仏教の弱点である都市における布教活動が積極的に推進され、社会福祉事業団も1995年に設立され、2000年には政府からの援助を受けたテンプルステイが始まり、年間20万人が利用するという現状が報告された。また、韓国仏教には日本のような檀家制度はなく、在家信者は寺院よりも僧侶個人との結びつきが強いが、大寺院では信徒組織も整備され、ボランティア活動が盛んであることも指摘された。近年は高学歴、富裕層の信徒が増加傾向にあるが、学歴偏重の価値観が支配する韓国において、仏教には実際に人々の生きる力、安らぎを与える役割が期待されており、瞑想、相談業務などの専門的能力を身につけた在家信者や僧侶の育成、教育機関の整備が大きな課題であると指摘した。

【議論の概要】

入澤崇氏をファシリテーターとして、報告者とパネリスト（林行夫、三谷真澄、浅田正博の3氏）を中心に議論が交わされた。

まず林行夫氏は、中村尚志氏の報告に対して社会学の観点から補足を行った。出家主義が上座仏教の特徴であり、多様な階層の人々が出家することになることでスピリチュアリティは失われる傾向にあるが、僧俗の周流が地方仏教を醸成する力となっていると林氏は指摘する。さらに19世紀以降国家仏教が形成されるが、その影響を受けながらも地方の特色を持つにいたる。いわゆる社会参加型仏教の淵源は、上座仏教社会が本来的にもっている構造である。またグローバリゼーションの中でスリランカでは韓国、台湾の仏教界の支援を得て女性出家運動が興るが、仏教社会に与えたインパクトはほとんどなかった。このような宗教における国際的なクロスカップリングは、実践基盤を持っている地域にどう展開していくかが重要なポイントとなると指摘した。

三谷真澄氏は、スダン・シャキャ氏の報告に対して、多様なネパール仏教が今後進んでいく方向に注目しているとの感想を述べて、信者の立場から3種類の仏教はどう位置づけられ、機能しているのか、と質問した。これに対しシャキャ氏は、宗教と民族との密接な繋がりを示した上で、新たに流入したテーラヴァーダは開かれた仏教であるが、チベット仏教は言語の問題もあり門戸はやや狭く、僧が世襲制であるネパール伝統仏教はある意味で閉鎖的であると述べる。しかし、ネパール人はネパールは釈尊の生誕地であるという誇りを持っており、3つの仏教に対して区別することはあまりない。また王制の廃止とともに民族意識が高くなってきている。若者たちは宗教行事にそのアイデンティティを求める傾向があると答えた。

浅田氏は藤氏の報告に対して、アジア仏教が日本仏教と同じ問題点を抱えている事、政治と仏教（王法と仏教）との関係の重要性を述べて、僧侶妻帯、先祖供養、方便（現世利益）についての韓国仏教徒の捉え方と、仏教と福祉活動に関して質問した。これに対して藤氏は、韓国では僧侶の妻帯が社会的に許容されていないこと、葬儀と仏教との結びつきが希薄であり、儒教が死後の世界観に大きな影響を与えていること、現世利益については、ヴィパッサナ瞑想を進める寺院もあるが、

「仏様に御願いすれば物事がうまくいく」という感覚が常識的にあること、福祉活動を通じて仏教の布教活動が盛んであることなどを述べた。その後、フロアーからの質問を中心に「政治と仏教」、「民衆と仏教」、「仏教界の社会活動」という3つのテーマについて議論が交わされた。

以上、3氏の報告により、シンポジウムの



主眼であるアジア仏教の現状と抱えている課題を認識し，議論を通じて当研究センターの今後の活動指針を得ることができた。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター

第1回国際シンポジウム「平等を求めて ～南アジアのマイノリティとマジョリティ～」
セッション1「現代インドにおけるダリット／仏教徒コミュニティの現状」

■報告者・報告題目

ヴァレリアン・ロドリゲス（ジャワハルラー・ネルー大学）

「近代性と宗教におけるアンベードカル」

舟橋健太（京都大学）

「「カースト」と生きる

～ウッタル・プラデーシュ州における仏教徒ダリットの事例から～」

榎本美樹（独立行政法人 国際協力機構）

「次世代育成を目指す仏教施設の役割・ネットワーク調査

～インド仏教徒のルネッサンス～」

足立賢二（四国医療専門学校）

「南インドでのはり・きゅう治療と「改宗仏教徒」

～無料医療奉仕活動 Free medical camp の分析から～」

シヴ・シャンカル・ダース（ジャワハルラー・ネルー大学）

「ウッタル・プラデーシュ州のアンベードカル仏教（1951～2001 年）

人口統計的および社会経済的発展の分析」

■パネルディスカッション

ファシリテーター：桂紹隆（龍谷大学）

ティモシー・フィッツジェラルド（スターリング大学）

パネリスト：佐藤智水（龍谷大学）

池亀彩（国立民族学博物館）

グニャーニャ・アロイシャス（近現代インド研究者）

ヴァレリアン・ロドリゲス

舟橋健太

榎本美樹

足立賢二

シヴ・シャンカル・ダース

■開催場所：龍谷大学大宮学舎清和館 3 階ホール

■開催日時：2011 年 1 月 22 日（土）13：30～17：15

■参加人数：80 名

【報告のポイント】

1956 年、B.R.アンベードカルによって率いられたダリット（不可触民）の仏教徒改宗運動は、既にインドで廃れていた仏教が復興するきっかけとなった。アンベードカルの死後、半世紀を経た今、1 千万人から一億人の仏教徒が存在するといわれている。ナグプルを中心として仏教寺院の再開、布教活動、福祉活動など多様な活動を展開している。アンベードカルの仏教理解が及ぼした影響と仏教徒コミュニティの現状とその課題について報告と議論がなされた。

【報告の概要】

まずアンベードカルの思想面から、ロドリゲス氏が報告した。アンベードカルが仏教に改宗することで、インドの世俗的な近代化プロジェクトに大きな打撃を与えたとする見方に対し、氏はアンベードカルが宗教のある特定の理解の前景に横たわる近代化プロジェクトについて賛同していたとみる。アンベードカルは人間の理性、科学そして意思疎通の方法が生み出したものとしての近代化は、宗教に根ざすことによつてのみ持続し得ると考えた。この考え方は、西洋世界の主な思想家と一線を画すものであり、インドにおける近代思想家たち（オーロビンド、イクバル、ガーンディー）への親近性と捉えられることにもなった。しかしアンベードカルは、ガーンディーのように宗教を近代性と対立させることはせず、その二つは対話できる関係のものであるとの見方を示した。

舟橋氏は、ウッタル・プラデーシュ州西部における現地調査で得られた仏教徒ダリトの宗教・儀礼実践に関する事例とかれら自身の語りを検討することにより、いかにかれらが親族や姻族と交渉しているか、すなわち、いかに「カースト」なるものとともに生きているか、という問題について報告した。舟橋氏の調査結果によると、仏教徒ダリトたちは、仏教徒としてのアイデンティティを強く主張している。仏教は、インド発祥の宗教であり、また世界宗教でもある。ゆえに、仏教徒ダリトたちは、ヒンドゥー世界とのつながりではなく、インドとのつながり（さらには世界とのつながり）を主張しうることになる。また重要な点として、仏教徒ダリトたちは、ブッダと15世紀頃の詩聖人であるラヴィダースとともに、ひとつに両者が平等主義者である点から信奉の念を抱いている。仏教徒ダリトは、この両者を信奉することにより、仏教徒であることとチャマールであることとの両面をも含みつつ、ヒンドゥー教徒のチャマールたちとの交渉を行いつついる。それは「平等」に対する強い信念に由来するものである。

足立氏は、自身が参加している仏教徒コミュニティが推進する医療活動について次のように報告した。現在、世界各地で多くのはり・きゅうによる国際協力活動が実施されている。南インドでは現地の仏教指導者がはり・きゅうを活用した無償医療奉仕活動を2002年から企画・運営しており、日本のはり・きゅう師らが当該活動に参加している。当該活動は現地仏教徒が支援し、受診者の大部分が「改宗仏教徒」である。従つて、当該活動を分析することで、現地でのはり・きゅう施術の意義、現地仏教徒の布教活動と組織化、そして「改宗仏教徒」の受診行動を把握できる。足立氏はこれを3つの異なる視点、すなわち①受診者の受診行動、②現地仏教徒への影響、③はり・きゅう師の参加動機から無償医療奉仕活動を分析した。その結果として(1)受診者は健康状態を自分で決め、症状に対処する優先順位を自ら設定し、治療方法を自ら選んでいる可能性が高いこと。(2)一連の医療奉仕活動は、現地仏教徒の着実な組織化に貢献していたこと。(3)日本のはり・きゅう師が「理想の医療専門職」として自らを規定できる活動に魅力を感じていたことが提示された。

榎木氏は、フィールドワークを通じて、カルナータカ州における改宗活動とその実態について報告した。1956年の集団改宗挙行以降、インドにおける仏教徒運動は、当事者によ

る仏教への改宗といった短期的かつ直接的な行動が注目されるが、一方で、改宗後の信仰維持や仏教徒の再生産のサイクルといった中・長期的な問題については不明な点が多い。次世代育成に取り組む青少年育成施設の実態とそこを利用する人々の動機や属性を調査することで、仏教的青少年育成施設としての禅塾の役割・意味・ネットワークを検証し、中・長期的な視点で活動するインド仏教徒の視座とそのコミュニティの実態を調査した。榎木氏は、カルナータカ州ビジャプル市に立地する禅塾に注目し、仏教徒コミュニティおよび仏教への関心を示すコミュニティの実態を明らかにした。

ダース氏は、大衆社会党の政策について、統計資料を用いて次のように報告した。ウッタル・プラデーシュ州のアンベードカル仏教徒は、いわゆる「アウトカースト」の改宗やその他の二次的な理由により、この 50 年間（1951～2001）で、他のあらゆる宗教コミュニティを凌ぐ比類ない増加率を見せている。彼らの社会経済状態は、他の宗教コミュニティと同等とは言えないものの、指定カースト／「アウトカースト」に比べると、識字率、男女人口比、耕作者の割合という点において、若干優れている。1990 年代の 10 年間で、政治の分野においても彼らの影響力は大きくなり、その後も発展し続けている。全体として、アンベードカル仏教徒は、ウッタル・プラデーシュ州の大衆社会党の政治的言説において、強い訴求力と重要性を有する。結論としてダース氏は、現代の大衆社会党政策は単にダリット政策と見ることはできないのであって、実際的に仏教徒によって主導されていると述べた。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、1980 年に見聞したインドにおけるダリットの仏教改宗運動について、仏教徒自身は非常に貧しく肩身の狭い思いをしていたが、誇りを持って力強く生活している姿に感銘を受け、仏教は本来的に人に活力を与える力を持っていることを再認識することができたと述べたうえで、各報告に対する質疑を行った。最後に、将来、仏教復興運動の活動とコミュニティが、誰に、どう引き継がれていくのか、という点に注目したいと締めくくった。

【文責】アジア仏教文化研究センター

第2回国内シンポジウム「中央アジアにおける仏教と異宗教の交流」

■報告者・報告題目：

宮治 昭（龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム館長）

「中央アジアの仏教信仰と美術—涅槃図と兜率天の弥勒菩薩を中心に—」

橘堂晃一（龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員）

「西ウイグル国の仏教—弥勒信仰を中心に—」

吉田 豊（京都大学文学研究科教授）

「マニ教絵画の世界」

■ディスカッション：「中央アジアにおける仏教と異宗教の交流」

【ファシリテーター】入澤 崇（龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム副館長）

【コーディネーター】三谷真澄（龍谷大学国際文化学部准教授）

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■開催日時：2011年2月26日（土）13:00～17:00

■参加人数：70人

【報告のポイント】

現代社会において果たして「文明の衝突」を回避する有効な手立ては可能であろうか。かつて中央アジアでは、仏教を中心としてマニ教やネストリウス派キリスト教をはじめとする多くの宗教が行き交い、共存していた。美術資料や文書資料には仏教と異宗教の融合の跡まで辿れる。本シンポジウムでは、仏教と異宗教の融合の諸相、さらには仏教の周辺にあった異宗教の様相に焦点をあて、文明間に対立を生み出さない方策を考える機会となった。併せて、仏教が異宗教と交流・融合を果たすことで、仏教内部に多様性を生み出していたことが確認された。

【報告の概要】

宮治昭氏は、「中央アジアの仏教信仰と美術—涅槃図と兜率天の弥勒菩薩を中心に—」と題し、様々な文化が融合し新たな信仰形態を生んだ例として、「涅槃図」と「兜率天の弥勒菩薩図」を取り上げ、その生成と伝播をインドからバーミヤーン、キジル、敦煌石窟まで作例を示しつつ報告した。インドでは生々しく表わされることのなかった涅槃の場面は1世紀ごろガンダーラで成立する。背景にはギリシア・ローマの葬送美術の影響も認められる。インドでは釈尊滅後の信仰が舍利・仏塔信仰に移るのに対し、中央アジアでは両者が併存しつつも弥勒信仰とその美術が顕著となる。弥勒菩薩はガンダーラ以降、王者風に交脚椅坐の姿で表され、その形姿はクシャーン王侯像に影響されるとみられる。キジル石窟では中心柱窟の回廊を右繞して「分舍利」や「第一結集」の壁画をみながら、舎利の供養と仏法の護持を確認し、回廊を出ると、主室前壁の入口上方に描かれた「兜率天上の弥勒菩薩」に目が移る構成となっている。バーミヤーンでは涅槃図と兜率天の弥勒菩薩が組合わされ、兜率天にいる弥勒菩薩のもとへ再生を願う弥勒上生信仰と結びつき、中央アジア色の強い仏教美術を生み出した。

橘堂晃一氏は、「西ウイグル国の仏教—弥勒信仰を中心に—」と題して、西ウイグル国の仏教信仰形態の変遷を弥勒信仰から辿り報告を行った。マニ教を信奉していたとみられるウイグル人は840年、東部天山山脈に移動したのを契機とし、固有の仏教文化を持っていた周辺オアシスと接触する。やがて彼ら自身が様々な仏教文化を形成した。ベゼクリク石窟誓願図にみられる宝石類により荘厳されたブッダの表現はマニ教の影響との指摘がある。史料から、ウイグル人は彼らが崇拝の対象としていた「天」を通じ「仏」という存在を理解していたことが確認できる。そして彼らの信仰を集めたのは弥勒であった。トカラ仏教から自然と受容されたという背景に加え、ブッダの場合と同様「兜率天」が彼らの信仰の基盤である「天」と同一視された可能性がある。ウイグル語經典からは、彼らの弥勒信仰に下生信仰と上生信仰の両者がみられる。史料を総合すると、下生信仰はトカラ仏教から、上生信仰は中国仏教から影響を受けたものとみられる。後代になるにつれ上生信仰を示す文献が多くみられる点は、中国仏教にシフトしていくウイグル仏教の姿を反映している。その要因には法相宗のトルファン地域への波及の他、ウイグル語写本から当地において願兜率天往生者としての玄奘が崇敬を集めていたという背景も重要である。

吉田豊氏は、「マニ教絵画の世界」と題して、昨年初めて発表されたマニ教「宇宙図」を含む、日本に所蔵されるマニ教絵画とその重要性について報告した。これまで「六道図」の1種と考えられていた大和文華館所蔵の絹絵が、実はマニ教の個人の終末論を描いた画であることが、報告者によって明らかにされたことを契機に、栖雲寺蔵マニ教のイエス像に加え、日本で個人蔵を含め7点のマニ教画が新たに見つかった。その全てが元朝期ないし、その前後する時期に寧波を中心とする中国江南地方で制作されたものと考えられる。この地域にマニ教徒が存在していたことは、マルコ・ポーロの『東方見聞録』や中国の編纂史料から知られている。吉田氏は、これらの絵画資料を現存するマニ教經典に記述される世界と比較して、絵画に描かれた内容を読み解こうとする。例えば、大和文華館所蔵の絹絵では、死後の裁きの場面に雲に乗る女性像が認められる。吉田氏はこれをダエーナー女神とみる。マニ教では、信者が生前に行った善行が、女神の姿を取って迎えに来ると考えられていた。またマニ教の世界観を示す「宇宙図」は、天界、十天、八地、太陽と月、光の流れ（船）、大地にそびえたつ須弥山、黄道十二宮、空中に据えられた裁判官、闇の国の表現により構成されており、これらの図像的特徴は、現存するマニ教文献が伝えるマニの宇宙生成論の記述に見事に一致する。またマニ教の世界観には仏教の世界観との交流をうかがわせる点もあって貴重である。今後この作例と比較して、これまでトルファンで発見されていたマニ教画、その他の断片についても再解釈する必要がでてきた。

【議論の概要】

パネルディスカッションでは、入澤崇氏をファシリテーターとして報告者を中心に議論が交わされた。

まず宮治昭氏は自身の報告に関し、弥勒信仰とインドの理想的な王、転輪聖王との結びつきがみられる点を補足した。入澤氏は、弥勒下生と転輪聖王との結びつきは、仏教伝播の過程における中央アジアの王権との関わりを見るうえで重要な視点であり、一方で、弥勒には民衆レベルでの救世主待望とも関連すると述べたうえで、ブッダの伝記を記す文献

の中でのブッダと弥勒に関する記述、なかでもブッダが下生する際に後継者として弥勒に冠を授けるという伝承は中央アジアの図像において見いだせるのか質問を行った。対して宮治氏は以下のように述べた。チベットにはその場面はみられるが中央アジアではみられない。しかしながら、ガンダーラにおいて弥勒は行者風に表現されるのに対し、中央アジアでは兜率天上の弥勒が冠をつけて表現されていく点は、この伝説を反映したものかと思われる。



次に橘堂氏は、ウイグルの弥勒信仰において上生信仰が盛んになる要因として玄奘への思慕もあった可能性について史料をあげて補足した。現在、橘堂氏が分析を進めているウイグル語の法相宗唯識文献の内容は玄奘の足跡あるいは功績に関する注釈書である。この点からもウイグル人にとって玄奘は特別な存在であったことが窺える。

入澤氏は、ウイグル人の持っていた「天」という信仰の上に仏教が受容されていった可能性の指摘は重要であると述べ、ウイグル土着の信仰と仏教の結びつきについてその他の事例はあるのか質問を行った。橘堂氏は、インドにも天中天という表現があることは興味深いものの、ウイグルの「天」と仏教の天との類似についてはもう少し検討したいと述べた。宮治氏は、美術史上、インドと違い中央アジアではドーム式建築が多く、その頂上に弥勒が表現されているように、天に対する信仰を想起させる表現が多用されると補足した。

吉田氏は、仏教とマニ教の関わりについて補足した。敦煌で発見される引路菩薩という尊格の図像は、雲に乗る点など上述のダエーナ像との類似点が注目される。さらに魂を引導するという役割も含めて両者間に影響関係が考えられる。引路菩薩は仏教文献では確認されず、早くから外来文化の影響が問題となっていた。今回マニ教画に引路菩薩に酷似する図像が発見され、ダエーナがゾロアスター教に起源をもつことを考慮すれば、影響はマニ教から仏教に及んだと考えてよいだろうと指摘した。これまでマニ教が中国で仏教に影響されたと想定される傾向にあったが、マニ教が仏教に与えた可能性も視野にいれる必要があると提言をなした。

入澤氏は、マニ教から仏教への影響について、仏教経典にみられる「摩尼光仏」という言葉はマニをブッダとみなすものかと質問を行った。吉田氏は、漢文マニ教文献のなかで「仏」という言葉は預言者を指すとみられるため、「摩尼光仏」は「マニという預言者」という意味ではないかと応え、中国では預言者を指す際に「仏」と呼んだ可能性について問題提起をなした。

以上により、中央アジアにおいて仏教と土着の宗教、文化との融合が新たな仏教信仰と美術を生成し発展した様相が明らかとなった。これは同時に現代における異なる世界観・価値観の共存へ向けて新たな視座を提示するものとなった。

【文責】 龍谷大学アジア仏教文化研究センター